

100年前から待っていた、 あなたを

ロシア語翻訳労働者

工藤 順
なほ

つらい。ここから出して。こんな間違ってる。と思うことは誰にでもあると思いたい。そんな時、あなたはどうか。自分が変わるか。相手を変えるか。しかしその思いが広く共有されたものだとすればどうか。あなたはつらさを語る。それが理解される。そうか、みんなもつらかったのか。ではやはり間違っているのではないか、社会が、制度が、国家が。みんなで外へ出よう。——ナイーヴな言い方もかもしれないが、1917年のロシアをこのように理解することも十分可能だと思う。

例えば「1917年にレーニンがロシア革命を起しました」という程度の記述でいったい何がわかるか。何もわからない。「巻き込まれた私」の観点は、いつだって大切なのに、いつも抜け落ちる。「私」とはあなたのことだ。例えば戦争のことをあ

なたは語る。ロシアが、ウクライナが、地政学的に、とあなたは言う。遠いから客観的に語れてしまうし、そのように語るのが優れた知性の証あかしと思わされていることもある。しかしどうか。戦争はゲームではない。例えば銃弾が胸に当たり、血が噴き出る。私やあなたが持つ唯一の世界がなくなる。消える。それが何千、何万回と繰り返される。後に残される者のやりきれない悲しみや怒り。こういったリアリティを欠いた「戦争談義」を信賴してはいけない。作家アンドレイ・プラトノフは、19世紀末のロシアに生まれ、革命を経験し、スターリン政権下のソヴィエト連邦で死んだ。ソ連時代がずっとそうであったわけではないが、スターリンのもとで、体制に歓迎されない人が何万人という単位で殺された。プラトノフは反体制の作家ではなかったが、体制

万歳の作家でもなかった。そのあいまいな態度は政権に嫌われ続けたが、殺されることがなかったという最低限の意味で「幸運」な作家だった——不幸なまま生涯ではあったけれども。この人の書くものがすぐれているのは、常に「巻き込まれた私」の目線で書いたからだと思う。

プラトノフは、人がより良く生きられる社会が ついにはやって来ることを待ち望み、その社会を「社会主義」と呼んだ。そういう意味でプラトノフは社会主義者だったし、時代遅れの左翼ヒューズの作家と

言えないこともない。ただ、プラトノフがすごいのは、そしてこの人が今でも読むべき作家である理由は、「人がより良く生きられる社会」などというものが本当はあり得ないのではないか、という不安と動揺トレゾウをずっと抱えていたところにある。一人と一人とがつくる「社会」とは何か、それは「良い」ものであることができるのか、という根本的な問いかけがなされる。

会社とか社会とか国とか。ぼくらはなぜ集団であるうとするのか。一人では弱いからだ。集団でないといけないことがあるからだ。幸福に生きるためだ。しかし集団を背負ってモノを言うとき、人はどれほどモノクソになり得る。「個人的には賛成だけど、社会的には、ね…」という言い方をするとき・聞くとき、あるいは歴史を学ぶとき、あなたはそれをよく知っている。個人に戻ったとき、人は良くあり得る——例えば、愛する人に最も良いことを願ったり、死ぬのは普通に嫌だと思えることができるのに。

ならばどうするか。プラトノフの小説『チェヴエングル』に答えはない。けれども、今なおぼくらに問いかけ、考えるときに寄り添うことをやめない。100年も前の小説が、少しも古びずに読む人を揺さぶり続けている。あなたにとって幸せとは何ですか、その社会は幸福ですかと、プラトノフは問い続ける。ぼくらは考える。考える。



『チェヴエングル』書影(デザイン: 清野公一)
幼少期のプラトノフの写真とともに



略歴
1992年新潟生まれ。アンドレイ・プラトノフ『チェヴエングル』(作品社、2022年、石井優貴共訳)で第9回日本翻訳大賞を受賞。2025年に向けて「プラトノフ・コレクション」の刊行準備中。